

銃
獵
の
葉

Ⓜ

075324-000-1

4-249

銃獵の葉

武石 寛三郎/著

M27

CEM-0245



銃獵乃菜全

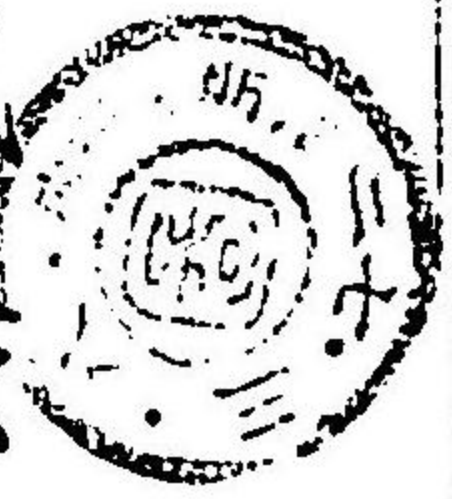
4
249

館書圖京東				
一	二		印	
冊	四	架	函	類
	九			門
	號			

鏡獵乃禁自序



今世之人以狩獵為賤業亦誤矣。閱吾國史之所登載文那
國史之所記錄之事跡則為治國之要。晰然而明也。焉王家
者則以之為國情觀察。侯卿者則以之為演武下民者則以
之為養志氣。皆治道之要也。而特至如以狩獵伴適。遂補生
計者則亦不足論也矣。昔者漢孝景好獵。自射熊羆。馳逐野
獸。司馬相如等以文雅優柔之質。而弄筆飾章。上疏以諫之。
此輩文人豈知狩獵壯遊。裨益於治道乎。詩云。不失其馳。舍
矢如破。孔子取而以脩之。為治道之要亦明也。焉文那者即



平野廣原最多之地而獵法亦與本邦異也御車馬載射人
而以馳驅矣故御術不精則射法不正也惟射御之法有正
範有詭道王良造父之徒而能為焉昔者趙簡子使王良與
辟奚乘蓋王良以正範馳驅而不獲一禽以詭道則獲十禽
是王良之能助美之拙以詭道者也雖然詭道者則君子不
取也是所以王良之耻與美乘而待之所謂不失其馳者即
是也焉本邦 雄略天皇殊好獵常自跋涉山壑能威服猛
獸矣其或獲 皇后從近臣雖有遇怒猶暴然而或避之於
樹上或藏身於車輛等之危險而其勇膽不屈撓誠可欽哉

中世富士之狩膾炙人口以可觀為演武之體也當亂世之
時則英邁之士嚴居川觀以能常試腕骨於猛獸練射藝於
飛鳥養志氣於其間而以能備佗日之運動而一朝起而掃
蕩天下之亂焉是即所謂狩獵之為本領也矣輒近士人徒沈
溺詞章風流豔慕名利而不思為國家治道之要不慮國家
將來之如何豈可堪慨歎哉余有感於茲不願淺識之才與
拙劣之筆草而以與少年緒彥矣蓋世已有獵書各種在保
考而可盡此道焉只恐為狩獵者射微而誇技食肉而養口
腹以為足則不可也售肉而易金亦不可也不願射擊之巧

妙耳不計口腹之飽暖耳常注視於天下之形勢措身於丘
 壑之險阻養豪邁不屈之氣象而以不可測報國家之念也
 唯徒勿招逐鹿而不見山之排雨云

明治廿六年晚秋誌於米原堂北窓之下

雲谷獵夫



深山路を踏むも雄々しき獵人の奥床くも世を一のぶら志
 志、伏と聞かえけハ一き山谷もふみさくみてよますら獵人

真胤

銃獵の棗目次

總論

銃器撰擇

火藥彈丸

射擊一般の注意

鴨雁獵

鳥獵

雉鶴雉獵

鳩討

兎獵

狐獵

一 六 七 八 十三 十四 十五 十六 十七 十九

銃獵の彙

総論

雲谷獵夫寛著

弓箭を以て物を射るも銃炮を用ひて的中を求むるも其技一なり古昔銃炮の未だ
 世に行はれざる時代に於ては専ら弓箭を練鍛えて以て征伐射獵の具と爲る今や
 を銃炮世に行はれて其の弓箭と比すれば術を得ること簡易に於て一朝其技に練
 達するは是れ將た其機械は特色巧妙に依るものなる故なり然りと雖も初心の
 人能く練熟家に就て其道を講究するの便且利あるに如かさるなり余や此の道に
 練熟したりと云ふにあらされとも好獵熟達の人に就て講し得たる所と余り實地
 に就き考案經歷したる事實等に就き聊か初心の爲めに此の書を著はし以て好獵
 者諸彦の参考と供せんとす抑も弓と云ひ銃と云ふ其の射撃に至りては同一轍に

さて古人其の道に熟達せる和漢其人に乏ちからる今弓箭の道に依りて其術を得たる人々を枚舉すれば本間孫四郎り魚鷹を敵船の上に射て其名聲を轟りたる奈須與市か扇鞍を敵船に射て其名を後世に傳ひたる鎮西八郎り胃の臺甲の扇只た阿兄の命をる所と大呼して人をして肝膽を寒らしめたる吾國有名の射人たる人々は元より武國の特色とて萬國會て比類無き所天稟神武の性の然らしむる所と雖も練磨其功を積まされは豈能く此の佳境に至ることを得んや支那古昔の射法羿蓬蒙甘蠅紀昌飛衛養由基の徒に至り能く其の道を論述して以て後世をえて惰眠を攪起せざる事跡格言を諸書に就て抄録し聊り射的の理を講せんと

蒼鷹の能く秋空に飛舞るるや下に鳥獸を瞰て之れを搏たんとそれは其銳意眼光既に其物を射る鳥飛ふこと能はざる獸走ることを得ざるは他なる其銳意物に感

るを以てなり縮竿セチコサを使ふもの小鳥を狙ふに竿未だ鳥身と達せざる數尺の距離に於て小鳥早く已に畏縮して悲聲を發するも同理あり列子湯問篇に甘蠅イモシは古に射を善くする人にして弓を設りて注目すれば獸伏ち鳥下ると云ひ又淮南子に楚王白猿シロサメを飼ひて自ら之れを射るに其の白猿矢を擡みて戯れ射ること能はざるを養由基といふに命をて射せざる養由基弓を調へ矢を矯て未だ發せざるに白猿柱を抱きて號泣せりと云へるも理之れに同故に鳥獸を射撃せんと欲する時は威儀嚴正にして銳意以て之れに接するを法とて徒らに無心あること木偶モノキヤの如くならはしかてか能く其意を達することを得むや只射撃の術に於て亦數條の規とせへきものありそは淮南子に射者儀小而遺大といふ如く其の既に狙點ネラヒを定むるに際ち大なるを見て大なりと爲せば其狙點亦た隨ち大あるを以て竟に狙狙を免れを命中果して正確を失ふ大なるを見て小なりと爲せば狙點隨ち小なるか故

に精狙能く命中を誤らさるゝ至る又た昔紀昌射を飛衛に學はんとて飛衛曰く汝先つ瞬さるを學ひて而ち後ち射を學ふへしと紀昌家歸りて其の妻の機を織る下に假臥し目を牽挺に接近せしめて瞬かさるを學ふこと二年終に其術を究め錐の鋒を以て背を衝くも瞬りて以て飛衛に學はんと乞ふ飛衛又曰く未だ不可なり小を視ること大を視るゝ如く微を視ること著を見るゝ如く而ち後我に告げよ紀昌爰に於て牛の尾の最も細きものを以て虱を縛る之を窓に懸けて視ること十日を経たりしかば寢大なるを覺ゆたり三年に於て之を視るに車輪の大なるか如く更に餘物を視れば皆丘山の如く竟に射法を熟得て彼の窓に懸けたる虱を射るに虱の心臟を貫きて其の牛毛猶ほ依然とて斷絶せさるに至りたりと是れに依て之れを見れば其の物を大視せると小視せるとの區別を論れば先つ其物を射んと欲する時は小を視ること大を視るゝ如く己の狙ひを定むるに當て

は小を儀として大を遺るへち大なるを見て大なりとせば狙點精ならん小なるを視て小なりとせば小物は射撃不能はさるへち只能く前條の規鑑を實地に試みて其習慣を自得するにあり

明治初年の頃在りては散彈銃未だ吾地方に行かれず只實彈和銃を專用せり其技の妙を究むるに於ては共に優劣かさか如くと雖も其使用の簡易便利なるは後裝散彈銃かりとて今や銃砲の製造は其妙を盡す好獵家の望に添ふを以て其流行年を追ふて隆盛し今を以て將來を推考するに男兒たるもの此技を知らざれば共に相齒せざるに至るへち顧ふに太平數百年人々墜壞鼓腹の樂境に生長る乱世干戈の何物たるを知らず徒らに深慮に詞章を翫弄して身體の軟弱を顧慮せず戶外の壯遊を目えて賤者の所爲となすに至る嗚呼國家一朝事有るの日に際ち炮聲に其耳を覆ひ硝煙に其眼を眩る國家の危殆或省みず安を偷み生を貪りて以て區々

小徑に身を終る是れ余り甚だ取らざる所に在て余か少壯の時を追想し大に余
か往時の經營を悔るも馴馬も尙ほ追ふへからん今や歳齡正に知天命に垂ナシクとし豪
放氣を吐くも人或は嘲笑をへしと雖も老ひて益々壯なるへと云へる古語を服
膺ウラ家事の餘暇は銃を肩に在て運動を山壑に試む其益をる所は自己身體の健康
と子孫軟弱の遊戯を規箴せると又世間少年子をして此壯遊を誘導アチカし山野跋涉に
熱せしめ有事の口を待たぬんとする老婆心の止み難きに出たり請ふ世間少年子
よ余か此の壯遊を誘導せざるは大に後世に望む所ありて然り強アチカちに雉兔を射獲アチカせ
て晚餐の美を覓むるのみ非ざるあり

銃獵を爲す人は一素豪邁の氣象を養はざるへからん若し此氣象アチカ乏き者は種
々の疑念を惹起し疑念を帯ひて射撃せれば一も命中をること無き世人或は疾病
に懼り巫祝に病源を問へば狐を殺せアチカる崇アチカなり兎犬を害せアチカる果報なりといふを信

ふ忽ち豪志を挫折せしむる者少りら凡生類生を喜びて死を惡む皆然らざるは
なしと雖も皮肉の美角蹄の用を具備せるを推考せれば造物主は是等の物を生アチカ
て以て人間生活の調度に充てたるものにて凡て此世界の禽獸魚鼈は吾人か無
盡藏中の共有物たるに外ならん蓋し動物能力は多少休軀小大の差異に依り獵者
之れに接するの感情又差異かかるへからん譬へは雉を射撃する時と狐を射獲す
る感情は少しく異に在て狐と猪熊とは又甚だ是れに接するの感情を異にせし
斯の如く其情を動かすの多少に依り之を推して物大なれば却て命中を誤ること
あり徒らに巫祝の言を信し應報の妄談に心酔すれば是等の不覺を免れざるも
のなり故に云ふ獵者たるもの英邁の氣を養ひ以て物に接し疑懼心を惹起するを
平生に深防せしと然りと雖も獵者たるも亦仁愛の情無かるへからん獲て益
かき物は射撃をへからん他人の犬猫を射殺し或は可憐の小鳥を殺獲アチカて技に誇

る人あり余ハ此の輩を號けて暴獵者と云ふ

因ヨリに一條の語説を録カキて諸彦の參酌に供せんとす昔孟孫出獵カキて麇カキを獲たり其臣秦西巴と云ふ者をして先づ歸らしめ且之れに命ノチて曰く我今頃刻ノチに去て歸るへ去汝先づ此麇カキを持歸て烹て我を待て西巴則ち麇カキを携カキひて歸る時に麇の母西巴か後に追隨カキて悲號カキをなす、來る西巴之を見るに忍カキひて君命を忘れて其携カキふる所の麇カキを縱カキちたり孟孫家に歸りて麇の羹カキを求む西巴告るに實を以て去孟孫大に怒りて西巴を放逐カキせたり後一年に去て大に之れを悔カキひ人を遣カキはて西巴を召寄せ之を厚遇カキて遂に子の傳カキたらむ或人孟孫に云て曰く西巴罪を君に得て逐はる君今召カキて子の傳カキたらむは何ぞや孟孫曰く西巴は一麇カキをたも尚ほ仁に處せり況や我子に於てをやと好獵家亦是等の境遇に接カキふ惻隱カキの情無くんはあらむ夫れ銃獵カキを爲カキその目的に於ける一は禽獸を獵獲カキて家計の爲カキに爲カキるものあり一

は無爲を苦て逍遙に伴はんとするものあり前者の論カキるに足らむ後者は瘠カキ戸外の壯遊に近き思有りて之を非と見るにあらむと雖も余を以て之れを見れば未だ本邦子弟を教育するの道に非らむ昔は兵農分れて農は兵と與らむ今や兵農相混カキて今日は農たり明日は兵たり且や本邦建國の道たる武の尙カキふへく缺くへからざるを邦の臣民に於て苟カキも男兒たるものは常に國家に報カキするの準備無くんはあらず余は蓋カキて此の重事を去て銃獵に寄托せんとす學々カキと去て名利を覓カキむるは國に報カキする所以に非らむ汲々と去て富貴を求むるも又國に報カキする所以にあらむ如かむ山林を跋渉して肌膚カキを去て風雪に堪へしめ骨肉カキを去て疲倦に耐へ去め志氣カキを去て豪邁カキから去めは以て國家に報カキするに足らん況や利器を翫カキ弄カキて去て其技に長カキまるに於てをや顧カキふ本邦士人の報國カキの志に富めるは史カキを繙カキきて之れを知るへく一介の孤兒と雖も山林に竹木を振カキふて腕骨カキを堅カキめ馬を丘壑カキに馳驅カキし

て身體を輕捷ならしめ終に天下の亂を一臂の下に掃蕩して英名を竹帛に垂る、
者枚擧に違あらざる是亂世士人の事に於て今の時の之れに異なりと云ふと雖も治
に處て亂を忘るへりらる今日治まりて明日亂れざるを知らんや治亂變遷は人世
の免るへりらるる數あるか故に安逸偷安の風俗を矯正し國家將來の準備を爲し
子孫を以て尙武の志を繼かめ以て亂世に備ふに足らば余の死して且冥るに
足るなり世人宜しく余が微志の存する所を了察し銃獵を以て只に家計と遊戲と
にのこ偏執せざるもに報國を旨とす少く費用を投じて自ら之れを爲さず且つ子
弟に之れを爲さめんことを切望す

此の總論を草紙終ひて尙は能く西洋諸國の形勢を察するに方今英米諸邦銃器製
造の巧妙を極め且つ銃獵の流行歲月を逐ふて隆盛なるに實に驚くへる皆驚くへ
きのみならず亦余等を以て歎きへく憂ふへく恐るへき種々の感情を惹起せしめ

たり嗚呼歐米は何爲ナンスレを各種精巧の銃器を製作するや歐米は何爲を此技を好むや
歐米は何をそれ活潑壯遊を好むや蓋し這の數個の爲さるへりらるる理由は何
そやと顧みて吾國を省りみれば少年輩は菜色を帯びて机案の間に無稽の書を讀
めり壯者の汲々とあて名利に奔走せり本邦士人は何の故に此の活潑壯遊を忘れ
たる歟思ふて譬に至れば百感胸宇に溢る蓋し學者能く國家の貧弱を以て富強を
らめ木偶人を以て能く兵たらめ名利家能く國家の亂離を糾合すと云は、吾
輩又何をか云はん

銃器撰擇

方今英米各國製造の輸入銃は種々高尚の銃器にて其精工を究め實に人を以て歎
美せむへる吾國村田式は元軍銃の發明に出たりと雖も之を獵銃と爲す亦簡易
に於て却て輸入銃に勝れり蓋し英國製二連銃は近來本邦好獵家の垂涎して以て

大金を投る之を購求するもの少からと雖も其之れを弄して鳥獸を射獲するに際しては恐らくは隔靴搔痒の憾無き能はる何となれば此二聯銃は總て照尺無きを以てなり金丸銃炮店は二聯銃使用方を説明して一本邦人は實彈和銃を使用する其習慣として照尺無き銃は何となく命中を誤つ心地するも三十發乃至四五十發射試せきは普通其妙處に至る蓋て運用の妙は銃に非らとて手中に在りと知らるへと云へれとも銃術は弓術との異にして二個の準器を具備せよ所以に其彈丸の性銃孔の直道に於て之れが習慣を受け一直線を進行するものなれば之れが準器を具備するの當然のことなりと若し強て準器を無用のものとせるからは規矩準繩皆無用とか妙は手中にありとて大工は墨繩を用ひてて建築を爲し測量師は測器を用ひて深淺高低を定め獵者は銃器を用ひず石を投てて鳥獸を獲へと世間豈此の如き人在らんや蓋て二聯銃は口徑最も巨大に於て多く散彈多

量を込るものなれば正しく狙點を定めざるも命中と且平野沙漠に於て突然飛奔の鳥獸を速射するに便なるを以て敢て附尺を附するの必要なと思考せり果て然らば吾輩が直行彈丸を飛てて其個に其準を誤らざる所謂正範の道に適せよとて詭道の術なれば吾輩には不適當な銃に於て且徒らに高價に購へんよりは寧ろ單身の精工銃を購求するの勝れるに知りて余は常に村田銃を賞揚する所以は裝彈出入の便あるのみならず有事の日に際て常に此の銃を使用せ慣れ手を軍銃に易ふるも敢て差支無きを以てなり十文字氏の銃獵新書にも村田銃を論じて此のことを記せり然りと雖も這は大體を論するのみ他銃を使用せよ人は村田銃をも自在に使用を得へけれ敢て差支無るへと要するに銃炮店が高價の銃を賣らんと欲て無實の機能を揚言するに惑はる其各正價表等に就て能く其便否を考定して撰擇せよと但て絞筒銃は散彈のみにて實丸の其効なきものなれば面白か

らそ又二十四番徑以下の小口徑銃も望まからそ

火藥彈丸

火藥は成るへく上等を使用せへそ下等火藥は有効瓦斯少しか故に其分量を増加せざるを得若し之れを増加せれば藥筒の境域を狭め彈丸隨て減少せざるを得そ且銃身内に夥しく餘燼を遺留し其瓦斯口を出ること遲緩なるか故に銃身熱をて竟に外部錆留色を損傷すへそ

彈丸散丸を云ふは地方に因て其大小を異にそ暖地の鳥獸は身體弱く寒地に在るものは一層強さか故に是に注意せされは意外の不覺を感することあり譬へは東京以南の雁鴨を射撃するに純鉛三分彈を使用するに吾秋田地方にては四分餘の彈を要する割合かりとそ獸類に於けるも兎を除くの外に吾秋田地方にては二十番以下の小口徑銃の散彈にて斃る、獸はあらそと知るへそ然りと雖も飛切を撃には

鳥獸の大小に依りて一號彈より三號彈を用ふるを利ありとそ

出獵の際は必し實丸裝彈藥も携ふへそ且寒地の鳥獵は強壯なるか故に其遠射に於て雁鳥類は散丸其効無きことあり中遠間位にて鴨かとを射撃するに少そ風のりても散丸飛散することあり況や遠射以上四十間より於てをや

散丸の効力は多く近射にあり四十間以上なれば十二番以上の大口徑銃に非されは命中正確を保し難そ此際は普通小口徑の獵銃は實彈を用ふへそ彈丸は實散とも総て正圓なるものを要す正圓からされは遠距離に達せず且命中正確ならそ

射撃一般の注意

銃炮は最も危険の機なり平素之れを取扱ふに於て宜しく注意せへそ裝彈を排除せそ若て家屋内に放置し誤て撃鐵に觸る、時は意外の珍事を招く或は裝彈せそ

銃を家宅人傍に於て翫弄せる等は皆最も危険の至極なるものあり

出獵の時は直ちに裝彈せる故安全器に注意をへし若し安全器無き銃からん深林
篠樹の間を行く時の成へく筒先きに注意をて獵友從僕に向けざるを要す此の注
意を怠り意外の珍事を演出を甚きは人をて死に至らぬめたるもの往々ある
て之れあり豈慎まざるへけんや

凡そ鳥獸に向て射撃せんと欲する時は先づ彈丸の達する處に注目せへし就中田
圃中に於て鳥獸を見留め只之を獲んとする雄心勃々たる時は曾て人蓄の在るを
顧みさることあり是所謂鹿を逐ふ獵師山を見よといへる諺は實に銃獵家頂上の
箴砒なり

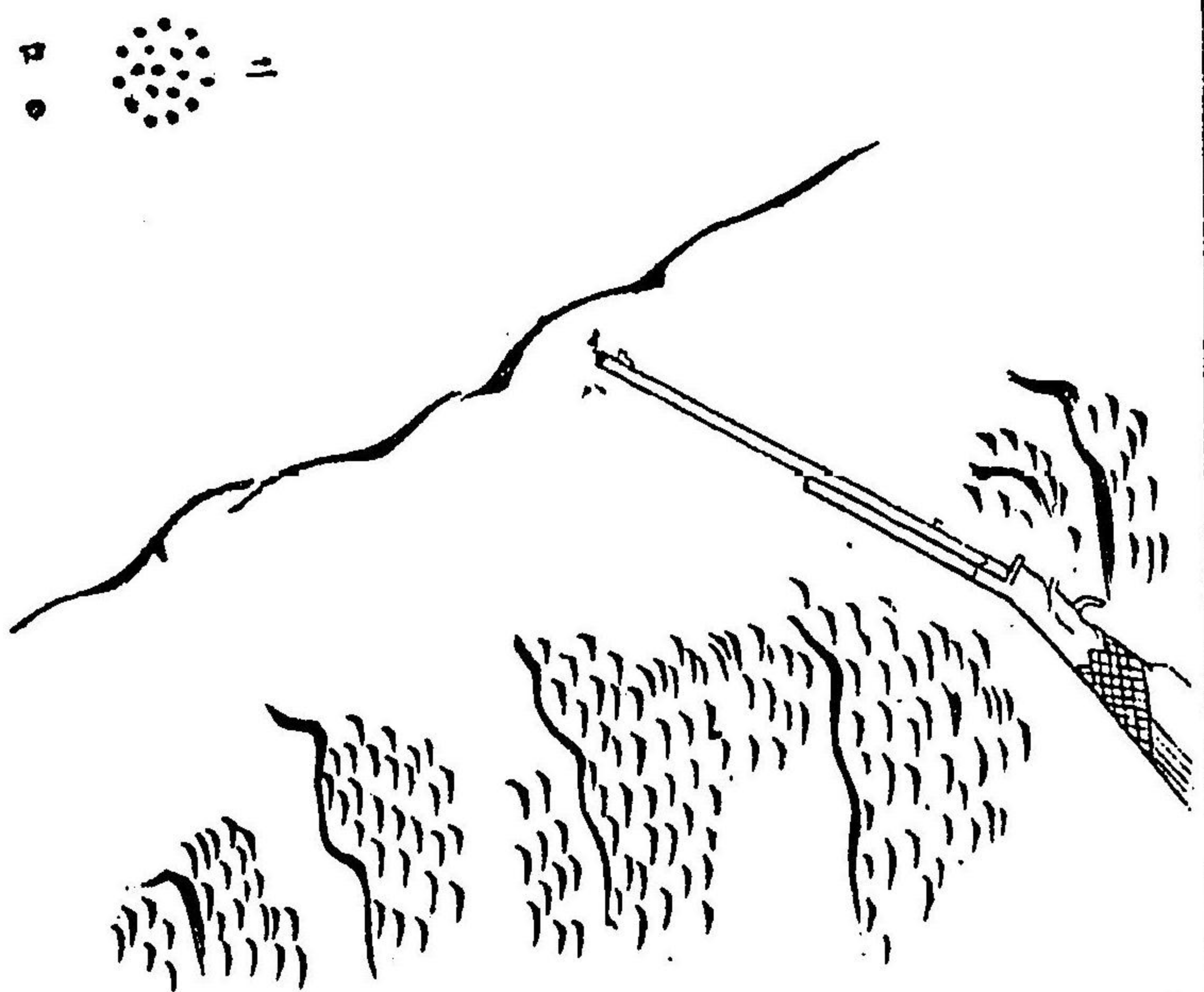
池沼郊野に於て雁鳧雉兔等を寄討するに身を堤防倒木等に隠し發射するに銃
口に注意をへし若し銃口地上及木等に接近をて火藥瓦斯の噴出を支障をれば其

反動に依りて銃丸狙點に達せし飛散することあり是余り屢々不覺を感ふたる銃
獵中最も多くある障害なり余或日鳧獵を爲し小阿仁川に臨みふに折節十二月末
に於て風雨甚きはことあり其翌日なるを以て雪は踏めとも跡を印せざる程凍堅
をあり對岸の淺瀬に真鳧三四十羽群を爲せり寄討をかさんとするに物の身を隠
をへし無志辛ふをて少し小高さ処の下へ匍匐を首を上げて距離を檢するに僅り
に二十間を過ぎ漸く銃口を其上に出る狙撃するに四分彈二十八個一も其處に
達せをて對岸一丈餘上方に歴々其痕を認めたり失望限り無く立て銃口の邊を
檢それは發出瓦斯雪を裂て深さ三四寸なりき這は余か不覺を取りを第一なり又
其後年獵友と共に山本郡に遊獵を或日余は獵友と東西に別れ終日獲なくをて宿
処に歸りふかは獵友は早く歸り居て大に當日の不覺を慨歎を居れり余其故を問
へは這は山中の池沼に雙雁を認め堤防に寄せて距離を檢すれば二十間以下ある

を以て手中に容れたる心地を以て發射せしと思ひさや雙雁除々して飛去れりといふ其處は宿処より程近きを以て翌朝往て其跡を檢する堤防廣さ三間許り平坦にして草も生へを蓋ふ此不覺は銃口を直ちに此の堤上に載せて發射せよ故發射瓦斯甚多く地上に激動をて貫丸おれとも何れに狂奔せしや得て知るへりら其後も雉兔等を寄討ふて是れと同一なること許多ありたり這は銃獵中免れざる障害なるを以て其理を詳悉せんか爲め左に圖解を第一圖は其障害地にして第二圖は安全の位置なり

第一圖

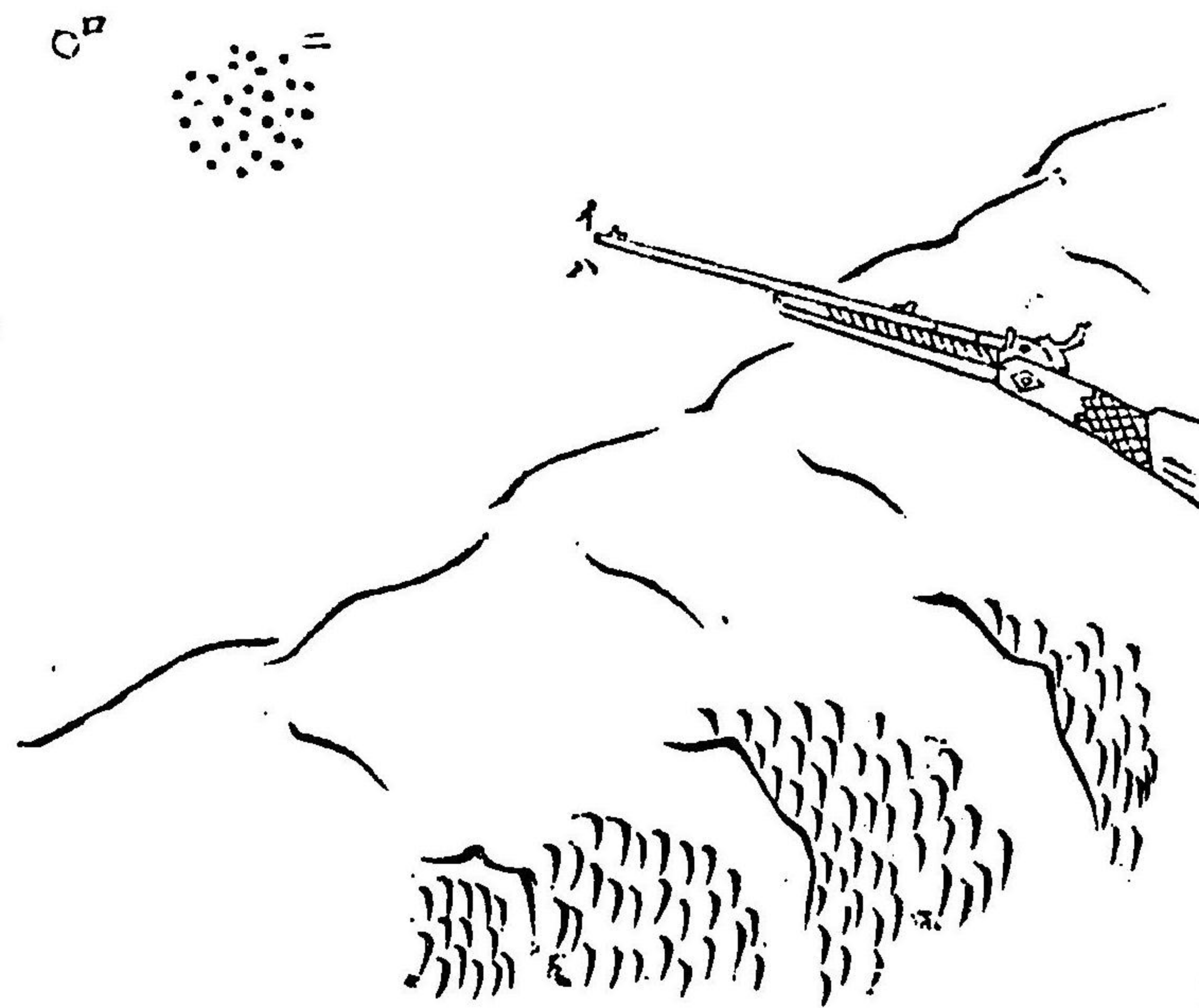
- イ 銃口
- ロ 狙點
- ハ 瓦斯激動地盤
- ニ 銃丸飛散



第二圖

- イ 銃口
- ロ 狙點
- ハ 銃口下
- ニ 銃丸道

圖の如く銃口下地上と相距ること一尺二三寸以上なれば障害を受ることな左右上下共皆同也



禽獸に向て發射するには其發射の時機を誤るへから先狙點の距離を測定を餘り遠巨離なれば發射其効無きのみならず却て鳥獸をして炮聲に驚かしめ警戒を敏捷からむ宜しく適當の巨離を測り眼を準器ホサビに注ぎ後一二呼吸ヒ間を發射の時機なりとす若し此の時機に於て障害とあるへきものあるか若しは他の支障ある時は第二ヒ時機を待つへし呼吸錯乱をへらる

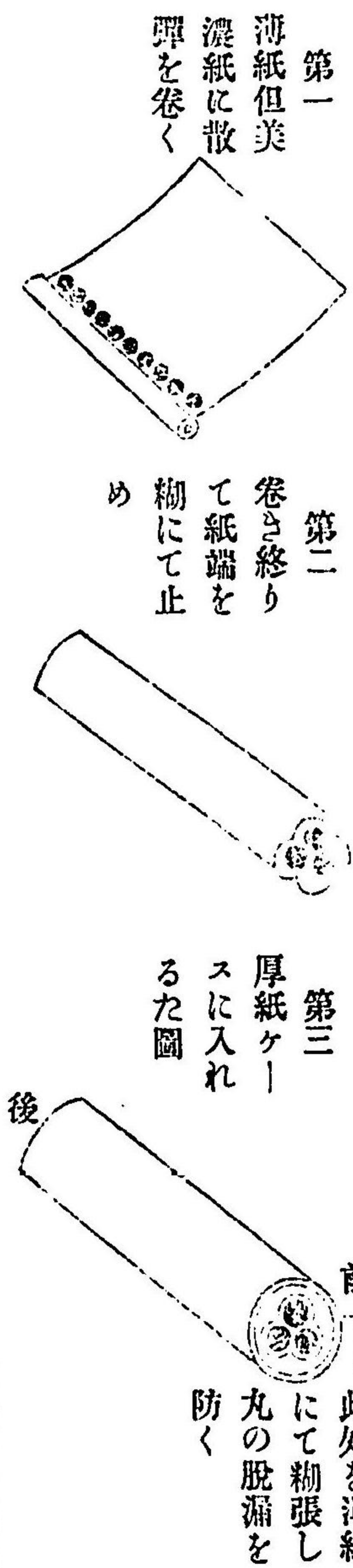
飛討は忽然飛立もの身を藪叢に寄せて飛雁飛鳴の頭上を過るものを撃つとの區別あり迎ひ討追ひ討横討あり少しく練熟せされは多くは其發射時機を失へる巨離の遠近に依ると雖も總て其先きを狙はされは命中せし獨獵の時は多くは追ひ討なる故發射最も難とぞ獵友獵僕を伴ひたる時は身を隠して之を追はるの飛鳥ヒ稍身邊ヒに近づくを射撃するは最も能き手段なりとぞ風の強き日は散弾多く其功なし成へく風上より射撃をへる風を横切りて發射を

れは彈丸風力に押曲せられて其彈力を失ふ故に命中せざ又風を迎ひて發射するも命中少き斯る時は實丸に如し強風なれば實彈も其効なきことあり

彈丸若し艸莖木葉の柔軟なるものに觸るれば其直行を失ひ横曲反射種々の異動を生きて之れを爲め人畜を傷け或は死に至らざめたること往々あり是其飛奔の猛勢物に觸れて激動を起さるものにして恐るべきものと云斯る猛烈なる直行飛奔なるを柔軟なる草木葉に觸れて何故に横曲反射をへきといふは是所謂柔能制剛と云ふ理に於て已に反對なるものに觸る、故あり之れに反て堅剛なる物に觸るれば彈丸之を貫通して過ぎ穿貫する能はされは其中に突入して止まり物隔よ堅ければ其処に墮下をへき只恐るべきは柔軟物ありとす

因に前裝銃を以て遠射を試みたる一條の語を記せん但し前裝銃の不便なるは今爰に喋くせむと雖も亦一の特効を奏することあり明治十八年余か所持せし獵銃

は前裝銃に於て二十四番徑なりき嘗て遠射法を研究し一の裝彈法を發明せり這は同十九年の冬にして或日實地に試みんとし長子を伴ひて小阿仁川に歸り一群の鳥を見留め態と其の遠巨離五十間餘アリの鳥に向て發射するに果して命中せり尙は散彈の聚散を検するに集束度に適たるを以て爾來此法を用て遠射を多く鳥及兎を獵獲せり其法四分彈を薄紙に九個つ、を一巻を三巻ハナニスして二十七個を蜂巢形に卷きたるを厚紙半紙四枚打に袋に込め但し袋は則ちケースに類するを以て銃口に準えて製し火藥は尋常より二分許りを増加し送り蓋を入れて後蜂巢彈を緩やかに収まる様に込るなり左に圖解す



此書を草し終へて後大藏組銃器正價表を閲するに舶來網玉のことあり這は張金を以て散丸を網羅を遠巨離に達せしめ聚束命中せしむるものなりとあり余り此蜂巢彈の理と符合するを以て爰に記す但し是は後裝銃の藥筒にして前裝銃用にはあらざ

蓋し此の蜂巢彈は特に前裝銃にのみ用ふべきものにて後裝銃はケースの長短に限りあるものなれば之を込ること難し只注意せべきは前裝銃へ蜂巢彈を用ふるには一發毎に銃身内部の烟垢を拭ひ去れば最も妙なりとぞ

散彈専用の絞筒銃は彈丸の集散を適當ならしめたる無上の發明なりと雖も前に已に云へる如く獵者たる者は特に散彈使用のみを以て足れりとせる者に非らず如何なる鳥獸に遭遇するも差支無きを以て獵者の本分と爲さへ若し實彈其効無き絞筒銃を携提して猪或は熊等の猛獸に遇は、肝膽を冷えて逃げ歸らんり鳴

呼斯る獵者は獵者たる面目を汚る世人に嘲笑を免れざるへ爰を以て余は絞筒銃を斥けて圓筒製を用ふるの便なるに如くぞと云なり

藥筒は發射後磨沙の細密なるものを以て内外を能く洗滌を置くへ此掃除を怠りて放置すれば煙垢終に藥筒を腐蝕せしむ且藥筒を掃除せしめて彈藥を裝填せれば火藥自然に濕氣を含みて發射迅速ならず又假令掃除藥筒なるも彈藥を裝填せしむ、長く貯ふれば火藥固結して發射また迅速ならず但上等火藥は此患少とぞ

鳥獸に向て射撃する時銃の先を物に載せて臺となし或は立木等に銃身を寄せて其振動を防ぐ人あり這は火繩銃を使用するの常にて今の後裝銃或は西洋形の銃に於ては甚だ劣等の射撃法たり何と云はれば凡て生類は動靜常からず靜なりと見れば動き動ありと見れば靜なり銃も又之れに隨て運轉せざるへからされはな

り且此の習慣は銃炮運轉の妙用を妨げて飛禽走獸に向て其發射時機を失はぬ鳴呼鳥既に飛去れり鳴呼獸走れりと手を空しくして茫然たらぬに至らん故に寄の或る場合を除くの外は総て銃炮を自在に運用を飛鳥走獸の速力を考ひ銃丸飛奔の速度を測定して以て發射其機を誤らざるを專習せよ

以上數條に述べたる外猶ほ注意せよべき種々の事件は能く其實地に就て自得せることを得へば余は是より鳥獸各種の獵法を區別して之を講明せんとす但鹿猪熊獺は余が未だ實驗せざるを以て之を述べず

鴻雁獵

鴻雁は鳥類に於て最尤物たり之を射獲するも又甚だ難からず鴻雁は飛討し宜し軀軀最も大にして群飛整列なり加ふるに其飛行の速力遲緩あるか故に一射して能く二三を獲へば

郊野田圃の稻塚若しくは草叢に身を寄せて飛雁の頭上を過ぐるを討つ亦可なり特に妙なるは兼て一二羽の雁を生獲して之を飼ひ置き此際之を適宜の處に繫き置けば飛雁之を見て曾て人に驚き忽ち下るなり之を呼鳥ヒトリと號く飛討寄討共に可なり但寄討ならは能く注意して此呼鳥を傷害せざる様にすべし

湖上或は池沼に於て浮游の鴻雁を遠射するには巨口徑銃に非されは散彈其効無きを小口徑銃は假令一二丸を達せしむるも僅かの負傷されは飛立程ならざるも蘆葦或は岸叢に潛匿して之を獲ること容易ならず射殺せよものは風濤の動搖に依て自然に岸に着くものなり

實散彈共に雁群を寄討するには平地ならは其射撃せんとする目的の雁を其前に居たる二三羽より洞見する心持して射撃せよ高處より見る時は鴻雁互に密接する處を狙ふべし

鳥 獵

鳥鴨は各種とも鳥類中の最敏捷なるものなりとそ之を射獲する最難し

獨獵の時は寄討を宜しとぞ獵友若しくは獵僕を伴ひたる時は適當の邊樹根若しくは草叢等に身を隠し群鳥を追はせめ飛討をへし総て鳥は水上を飛行せるものなれば上流より起たしめは下流に飛ひ下流より起たせめは上流に行くなり其射撃に便なる処を擇みて之に寄り獵僕をえて自在に之を追はせむるを得へし

鳥は秋季土用の頃より春季彼岸頃迄は地方の川澤沼湖に群栖し故に降雪の頃待小屋を此邊に造りて待討するを宜しとぞ此際同く呼鳥を使用せれば殊に妙なりとぞ蓋し待小屋は其期に先た、そえて新に造りし邊には容易に下らそまた待小屋は呼鳥を用ふる外は平生鳥鴨の多く下る邊を見立て造るへし平日多く下る処は一日に二三度乃至四五度も交代飛下るもの故斯る場合を見立て造るへし呼

鳥を用ふる時は格別なれとも左なき時は終日小屋籠りて鳥鴨を待ち居るとも時々遠巨離より鳥鴨の下り居るや否やを檢をへし故に小屋に到るの途中鳥鴨の目に觸れさる様潛行路を造るか若しくは堤防なとより身を潛めて小屋に入るへき襟の処を見立て作るを要そまた風雨にて他の狩獵を爲す難く別段家事に差支なき日などは小冊子を袖み終日小屋籠りを爲すも亦小人の閑居に勝れり呵々」

鳥討は能く訓致せたる獵犬を牽隨せれば水上に射殺したるもの或は負傷して潛匿したるものを探求するに妙なり鳥は寒水に游泳を身軀輕捷且剛壯なるか故に僅少の負傷は屑とせし水底に潛り或は叢中に匿る、等實に之を獲る非常の力を費することあり能く訓練せたる獵犬は之れを搜索するに於て最も其妙を奏せへし然れども和種の獵犬は訓練最も難く鳥獵に適するもの十中の一二に過ぎを却て種々の妨害を爲すものなり其他鳥鴨飛討寄討の法は鴻雁射撃と異なること無し

雉 鴉 雉 獵

雉山鳥は性質相似たるものにして是を獵獲せる最も容易なり彈丸は總て散丸三分にて宜る火薬も多量を要せし

獵犬使用を能くせる者は忽ち三四乃至五六羽を獵獲せるを得へし此獵に率ふる獵犬も又尋常のものにて足れり然れども訓練せざる犬に在ては一旦山鳥を藪叢中より追出し之を志て樹上に止まらしむれば恬と志て顧みず更に他物に向て狂奔せるもの、如きは亦用ふるに足らざるの樹上よ在る時て犬も又樹下に在りて之を睥睨しアハヤ樹上走り登らんとせる有様なれば鳥は只管眼を犬よみ注きて更に人を顧みず此時に於ては假令接近の鳥を討落すも其炮聲に驚きて飛去ることある忽ち志て三四乃至五六羽を獲る所以なり

獵犬を牽隨せし志て山鳥を獵せる時は歩行を靜りに志て足跡を搜索せへし若し

降雪前なるときは羽た、さの轟くを認め或は地上落葉の憂々たるを聞ことを得ん此時は總て銃の握カサを持ち安全器を外し銃を適度に構ひて靜肅進行せれば鳥の未だ飛立さるに早く已に認むることあり若し若しくは未だ認めざるに突然飛立ものあり何れなりとも之を速射せへし

遠距離の處に於て雉鴉の餌をあさるり或は警戒志て將に飛立んとせるを認めたる時は銃を右の手に提けて膝邊に下を決志て鳥に眼を注かざる無心なるか如くし志て遲滯することなく中足に進み寄り適度の距離に於て急に顧みて射撃せへし若し遠距離より進むに只之を射撃せんとせる銳意を示せば早く其鳥に感せるか故に飛立つへし是他無し前已に論したる如く蒼鷹また綱竿の類と同志理に志て近づきて是を狙へは狙はる、を知りても飛立つこと能はざる遠ければ其餘地を特みて遁逃せんとせるに依る是此れを機と云ふなり

雉は鶺鴒に比されは穀食を好むものなれば田圃適宜の邊に待屋を造り稻稭小豆穀様のものを置きて之れに附りあむへし余先年和銃を所持せし時なれとも雪上に二ヶ処の待小屋を構ひ一は圃中廣漠の中央に設け一は田圃間の凹処に構ひて小屋に至る途中鳥の眼に觸れさる様よ造れり而も圃中の待屋に於ては只一羽の雉を獲たるのみなれとも田間の待屋よては六羽の雉を獲たり這は僅々五六日の間にあて實に愉快を覺ゆたり

鳩 討

鳩は田圃の間よ於て秋季土用の頃より降雪前まで春は消雪の頃より射獵するを得へし彈藥裝填法は雉山鳥と同じ

田間或は圃中に下り居るものを逐へは幽林蒼鬱の処に飛去て樹上よ宿まるは此鳥の性質なりと故に容易く是を射獵するには獵友若しくは獵僕を隨伴するに

如かそ而も密に近傍の幽林大樹に身を潛め獵僕をよて追はあむれて必を飛來て樹上に宿るなり然れども一射して他は皆驚飛するものなれば處を換へさるへからそ

其他寄討飛討は普通の射撃法と異からそ

以上數件の外「かかそ」以下の小鳥射撃法は記述をへき要項あきを以て實地に就き試むるに如かそ但かかそ以下の小鳥討は散丸二分彈より其以下にて火薬も隨て少量に裝填をへし

兎 獵

兎は各地の山野に居るものにあて各地寒暖の差異に依り其獵法を異にせざるを得る吾か地方に於ては降雪の季節即ち十二月末より翌年消雪の頃までを以て兎獵の好時節ありとそ若し雪未だ山野を滿掩せされは兎は林叢中に伏居るか故

に其処を覓むる最も難くして必獲を期すへからる雪既に積る一尺以上に至れば歴々足痕を印せ然れとも足跡新陳錯雜をれば之を探るに又難し只其日に於て降雪の如何を卜ふ天氣明暗を占ひ以て兎獵に適否を考定む是吾地方の兎獵を爲す法ありとせ

此の兎獵たる一種特別の快味あり然りと雖も屢々實驗を歴されは獵者は殆ど盲人に異ならざる這は足痕の如何に依りて夜中の縦遊なるを曉天の宿り足あることを判別するものなればなり

早起當日の天候を檢めれば夜半の頃より未明までに雪二三寸乃至四五寸降り積りて後晴天とあれば此時こそ兎獵の好天氣あり多く得難きの天候なるに依り獵装を急ぎ天稍白くくるを待て攀登を試むへる兎は皆幽林を出て草野秣山等に出て白雪皚々の中に伏居る雪深れば其宵間より歩る境域廣からされとも雪若

淺ければ其歩をて食を求むる境域狭少なり然れとも宵間の足痕は既に夜半の雪に填塞せられて其既に宿らんとする時れ足跡のみ歴々とて判別せらる只此の足痕を認むれば兎を見出ること瞬時あり若し其処に伏臥せざるも一二の丘山を歩るに過ぎされは其跡を探尋せへし只是を探る獵者の足音を静かにせんことを要す兎は耳の聰敏なるもの故之を聞かば忽ち眼を覺し且逃走す兎は午前八九時までは熟睡を其後は目を開き警戒する故成るへく午前を以て獵せへる若し其処を逃走せると雖も能く其前を遮りて躊躇せしめは之を射撃する難らる又矮樹等の中に伏臥して兎身見ゆることあり此時は適宜に処に銃を構ひ獵友僕を志して追はしめ其の叢中を出るを待て射撃せへる彈藥は鴻雁と異るとか其足痕の縦遊なるか將九宿り足なるかを判別するは前に既に述べたる如く實驗家に非れば容易く區別を得ざるものなるり故に之に熟せる獵友に就き實地に其

説明を受くへきは勿論なりと雖も聊か卑見を記して初心の参考に供せんと
縦遊の痕跡は多く矮樹ある邊を縦横自在に漫歩するが故に強ちに之を探尋せし
して先づ其の外廓を檢せし外廓とは先づ其一瞥する限りの場所を大別して一
區若しくは二三區に分割せし其廓内毎に推して足痕其廓の範圍を越ゆるや
否やを檢するなり若し甲區の廓外超ゆる乙區に入らば乙區の廓外を檢し又超ゆる
て丙區に至らば丙區の廓外を檢し又爰に於て若し丙區の廓内を出さらば即ち
必し丙區内に宿せるを知らん

其宿まり足なるものは兎の性質物を懼るゝこと甚しく且魯頓かりと雖も他物に
自己の宿處を知らざらしめんか爲に其足痕を紛擾するの特性を有る故に先づ自
己の宿處へき樹根或は矮樹叢をトトして故に他處に往く如く近足の跡を印しつゝ、
また其跡を繰返して立戻るか故に恰りも人の文字を書きて又其上に文字を書せ

と如く讀み得ざるものに似たり斯の如くすること一ヶ處乃至二三ヶ處に於て跡
を暗まら忽ちに先きにトせし處に大足に奔踏して終に穴を穿ち其口に寢臥せる
もの、如し這は只概略を記するのみにして悉く皆然りと云ふにあらば實地に就
て之を自得せしむ

狐 獵

狐は人家近傍の丘陵に穴居し日中は潛伏して之を見ること稀れなりと雖も午後
三四時頃よりは食を覓めて田圃若しくは人家近傍の菜圃等に來ることあり然れ
ども這は稀に見る所のものにて專獵することを得し今經驗法二三件を記す
狐獵は總て雪上にあらされは能はし夜中は食をあさりて必ず人家近傍に來る曉
天は山に歸ると雖も人家を距ること遠からざるが故に其足痕を認めて山脊の凹
處或は山腹を探れば必し寢臥して宵間漫歩の疲倦を休養するを認むへし此際は

能く睡眠して人の近づくを知らずと雖も成るべく足音を静にするを要す但ち巨離の遠近に拘はらず又彈丸の大小に依らざるを以て實彈を用ふへ也

又宵間平生狐の來るへき肥料場の邊に酒「モロミ」二合許を藁苞に包みて投げ置き翌早朝之を食ひ去る否やを檢み若し食ひて餘粕を剩さる程なれば其歩痕跡を以て平素のものと判別せらる直ちに追隨して其足跡を究むれば三四丁の間にて必き之れに接近するを得へし若し狐の平生多く來らざる處ならば近傍三四丁乃至五六丁の路傍より油糟の細粉を散布して酒苞に達せしめ必き之れか香氣に導りて得々之を探尋せしめ識らす酒苞の邊に來るへ也這是容易に狐を獵獲する第一の法なり

又一法あり這是狩獵規則の禁する所なるか故に施行せざるものかれとも參考の

爲に記せり屋後に雪穴を穿ち穴底に餌を置きて二三夜之を食はしめは後夜夜必き來るなり而して先づ地上平行線に深さ二尺五寸を穿ち其口を前に正しく向け晝間裝彈せし銃を据て穴口に準^キを定め置き月の明かなる夜を卜して家屋内より之を望み狐の己に穴に入るを見て待討せよ也

因に記す狐は獸中最も鋭敏狡猾なるものにて平生能く人家に近づき雞を竊み菜を盜むに妙あり人之を惡むこと甚すと雖も又之を恐れて殺獲せざる人許多あり故に聊々其事を記して世人の惑を曉さんとす抑も禽獸の智能は大概同均一にて狐は狐に應じたる能力を具備し狸は狸の能力を備ひたるものなれば著るべき差異あらざると雖も其大小長幼の差に依り能力もまた多少あり故に古人も其著るべきものを取て以て書し載せ物に記あるを見れば敢て妄談とのみ偏執をへからざる蓋し物老ふれば變を爲し古今皆有らざるなら獨り理學者之れを論じて必き

此理なり只之を見る人の神經病かりと云ふと雖も古來妖怪の人を惱まふ或は英雄の之を捕獲したる踪跡を審かよれば決して妄談にあらざるもの許多に居れり今一々怪談を羅列して其然る所以の玄理を略述せんと欲せれども此獵書には要無きもの故特り狐の人以て之を恐る、所以を書して獵者たるもの、柔弱心を箴せへお抑も狐は前にも云へる如く狡猾諸獸に卓越し諺に所謂狐之智能服猛虎とまで云はれ又世人狐を目して稻荷と稱し祠を建て祀る等這は早くより行はれおものにて殊に東京傳通院の宅藏司稻荷おとは衆人の信仰を受け奇異の行ひあることは師翁の玉たをきに載せ又狐の人に托りて種々の善惡の事を爲したるは擧て數ひ盡せへりらをして其事十中の七八は實事の説に似たり誠に左もあらんか實に左もあるへおと雖も這は實に狐社會に於て衆狐に勝絶したる尤物こそ實に左もあらん今吾人此人間社會に於けるも一世の狂瀾を廻らお絶大の功業を成

就せお英雄も在りおに小利に汲々として蝸牛の角上鷓鴣の一枝に安んおる小人の在る有り殊に甚しきは一握の粟を盗み尺寸の帛を窃みて生活を補ふ如き小賊の在るありて其逕庭此の如く差異あるも世人は一概に之れを目おて人間なりと見るならん然るを況や狐に於てをや狐を古書に載せて論おる所を見るに能く北辰を敬お其死おるや必お北に向て丘を枕しお又狐は靈獸かり能く禍福を人に與ふなと、云ふて物々おく論お來れるに上世素朴の人情深く之を信おたる弊習の以て今日に遺傳お來れるものかり這は前に論おたる如く衆狐に優れたるものこそあれ野狐の比ひ人の雞黍を盗み食ふ劣等のものをも推并へて狐は皆然るものと爲おを得んや請ふ試に眼を閉ちて 想せよ吾國四千万人口に就て指を屈おるも忠孝節義を重んお仁義廉耻を知り尊内卑外を辨お國家の柱礎たり良二千石たり常に身を高尚の地位に措くもの果おて幾何かある吾輩凡庸の眼を以ておるも

名を國家に竭せに借りて自己の名利に奔走し外貌を裝飾して機變を利慾し弄ぶ法律を毛髮の間に避けて罪惡を社會に行ふもの擧げて數ふるに違あらざる万物の靈長たる人間に於けるも尚ほ然り而るを況や狐に於てをや虱は衣服に潛匿して人の肌膚を喰ひ狐は人境に穴處ちて人の物を窺む之を獵するは敢て窺むと窺まざるとに關せずと雖も靈狐豈夫れ斯の如き賤劣の所爲をなせる人の捕獲に罹らんとや士人たるもの喋々たる不經の世説に惑はざ凡眼を拭ひ去て區々の途に迷ふこと勿れ迷へは必ず氣を病むへと世間狐の祟りなりと唱ふるものは多くて皆狐の崇りに非らざして氣を病むの祟りなるを知らざる蓋し這は半信半疑に於て胸宇狹少なる小人輩に多きを見れば余か前説の非ならざるを知るに足らん然りと雖も亦余か輩と雖も常に惻愍の情無くんはあらず若し爰に狐ありて涕泣して憐み乞は、引詰めたる引鐵ヒキカネも引かてこれを容るるへりけん這は狐に限らざる何

物にても斯くあるへきは人れ人たる仁の道なり獵者たる者胸宇を濶大に養ひ神心を乾坤に放ち以て小徑區々の巷路に惑ふこと勿れ

獵犬

獵犬は獵者たるもの必を飼育訓練せざるへりらざる能く訓致したるものは獵僕を隨伴するよりも尚ほ一層の効を奏することあり其性放縱あるものは一二の專獵に用ひて少く其効無きにあらざれども之を一般に使用し難し能く訓練したるもれば山谷の藪叢を搜索して雉兔を驅り或は危險の懸崖に討落せし獲物を取り來らざめ或は負傷して逸脫潛匿せし鳥獸を搜り出さ或は水中に躍り入りて鳧鴨の射殺したるものを持來らざる等種々の効用ありて獵者の勞力を省く亦鮮少なからし今其欠點なき物を飼はんと欲すれば最も難きものなれども各種の洋犬に就て撰擇せんよりは寧ろ和種中に就て之を撰むの勝れるよ如かき洋種は尤も怜

惻に於て訓致隨て容易に且牽隨其効を奏する亦和種に勝れることありと雖も其性伶俐なるものは果敢の勇に乏く鳥獸には便なれとも猛獸に使用するは和種の獵犬に勝らざること數等の下にありとす和種の獵犬は素朴頑愚に近きと雖も堅忍の性に富み且つ果敢の勇ありて熊猪其他の猛獸と雖も敢て戰慄せざる能く之れに拮据を或は逸脱の猛獸を抑留して獵者を於て追及せざる等實に賞揚せべき偉勳を奏せし是れ余は洋種を取らざるを和犬を望む所以なり然るに十文字氏の銃獵新書に只洋犬各種を説明して和種に此の特殊の性質あるを論せざるは亦惜むべき哉

跋



人心者真也對人而始為偽也世人訝此言乎余將辯之焉天地萬物皆真而人特為偽者果何故乎蓋對人故也矣我雖真彼以偽則我隨而為偽故也人獨居則真對人則為偽非乎故人欲不為偽則不如不對人也焉鐘山之靈惡周顛之偽嗚呼山亦則有靈而夫真也乎仰而見山肅々而端嚴也雖風雲為愛烟霧為愁山壓豈敢與哉惟乎以之而為山非真乎矣巖石磊々桂松森々何物能誘欺之哉夫人欲使志真且大則宜友真與大也山之真而且大者人常接之則

使真鞏使志大之理豈得不然哉矣是蓋所以真對真之
故無偽之所容也焉余常好山獵矣偶上國見嶺四顧者多
時慨然而嘆曰嗚呼山水之美夫如斯耶森岳屹然而聳蒼
穹阿川逶蛇而画地境因獲山物森繁充塞人烟蓄蘆朦朧
風靡矣吐氣如霓仰天而噓焉嘗聞山水之美能出英雄也
英雄者夫誰哉舉是山水之美而果夫無英雄邪山水不磨
吾噓者夫不真乎顧而省人界者則波濤滔天風雲暗淡人
界夫爭何競何乎哉其所爭之者果是乎將非乎夫之生人
也有君而有臣有父而有子孫以相成天地之大經人夫外

君父而豈有人哉世人之所爭之是非者非真是非也以非
為是則莫不是以是為非則莫不非也真之是非者則無所
爭矣君臣之道便是也父子之道便是也矣人夫得仕君父
則故又求何哉夫然豈夫不然乎焉害吾君之國者賊也害
吾父家者盜也賊者則宜征之盜者則宜屠之征之有道屠
之有道之則兵也勇也豈在於文乎故曰人皆兵也矣兵之
所爭者非名利而在勇武勇武之所可尚者則誰能是非之
哉世之需名利之徒轉眼而續此書則入於勇武之境夫幾
乎聊添一言而以規焉

録
の
録

明治廿六年十月

男 保 拜 識 印 信



明治二十七年三月二日印刷
明治二十七年三月九日出版

(非賣品)

編輯者

武石寛三郎

秋田縣北秋田郡上小阿仁村佛社九十一番地

發行者

武石保太郎

秋田縣北秋田郡上小阿仁村佛社九十一番地

印刷者

伊川宗一

秋田縣秋田市保戸野表鉄砲町八十一番地

印刷所

秋田中正社

秋田縣秋田市大町二丁目八番地



4
249

